安易なリスク論に騙されてはいけない

畠山武道

原発の「処理」水、新型コロナウイルス（＋ワクチン接種）などをめぐり、「リスク」という言葉が飛び交っている。しかし、リスクという言葉には、どこか胡散臭さがある。というのは、リスクは、一般に「科学技術開発にリスクは付きものだ」、「自然界にもリスクはある」、「リスク・ゼロを求めるのは誤りだ」、「リスクと便益は背中合わせだ」などと使われ、「社会生活をするうえで、ある程度のリスクを受け入れるのは当然だ」という考えを暗に強要しているからである。

リスク（risk）という言葉は一七世紀後半頃から使われ、当初は「リスクをとる」のように、危険をおかして大儲けをすることを意味した。航海中の事故に対する補償を商売としたのが、ロイズ商会などの保険会社である。その後、数学、確率、統計、経済学が発達すると、戦傷、伝染病、労働安全、保健・衛生などについて、事故の確率を事前に予測し、対策をとることが可能になった。簡単にいうと、リスクという考えは、人間が自然現象や社会現象を予測し、対策を講じることができるという考えを前提としている（P・バーンスタイン『リスク―神々への反逆』日本経済新聞出版、一九九八年）。

しかし、リスクという言葉が爆発的に普及したのは、じつは一九八〇年代になってからであり、最後に記したように、そこには現代社会のありようが色濃く反映されている。

リスク学の専門書は、リスクを「被害が発生する確率×被害の大きさ」と定義している。つまり学術的には、被害の発生確率と規模が特定できる事象についてのみ「リスク」という言葉が当てはまるのである。しかし現在は、ほとんどあらゆる災害や事故について、リスクという言葉が安易に使われている。その結果、つぎのようなことが生じる。

第一に、すべての災害や事故は、確率論的推定によって数値化できるという思い込みである。功利主義経済学者ジェヴォンズは、日常的に起きる大半の出来事は、確率を適用し、数量的に表現できると述べている（バーンスタイン・前掲二五八頁）。

第二に、数字がもつマジックである。多くの人は確率という考えになじめず、生涯発がん確率一〇万分の一などといわれても、よく分からない。さらに、今が旬の認知心理学者や行動経済学者から、素人のリスク認知は利用可能性ヒューリスティクスによって歪められているので、専門家の判断の方が合理的だといわれると、だまるしかない。しかし、リスクの評価は、データや仮説の選び方しだいで数値に大きな差がでる。化学物質リスク評価の第一人者・中西準子氏は、「リスクの数値の不確かさ・・・いい加減さを知らずに、リスク論をふり回してはいけない」（『環境リスク論』九四頁、岩波書店、一九九五年）と警告しているが、そんな情報はほとんど伝わってこない。

第三に、リスク論者が多用するのが、リスク比較である。「食品添加物よりは、家庭内事故の方が死亡率が高い」などの主張が典型である。しかし、万が一、それぞれのリスク評価が正しいとしても、性質や推定方法がまったく異なるリスクを比較するのは乱暴な話である。一九八〇年代以降に精緻なリスク評価手法を発展させたアメリカでも、リスク比較は公認されていない。

そして、最後に登場するのが、リスクの除去にかかる費用と効果（または便益）を比較し、効果の大きなものから順に対策を講じるべきだという考えである。「一人の命を救うには、ベンゼンよりも開放型暖房器具を規制した方が効果がある」、「いや富と健康は相関するので、貧困をなくすのが先だ」（Richer is safer）という学者までいる。しかし、これらの主張は、じつは効果的な環境対策を引き延ばし、結局何もしないための口実に思える。

無論、誠実なリスク専門家は、上記のような乱暴な主張はしない。しかし、リスクという考えや数値は、つねに乱用され、一人歩きする危険をはらんでいる。ドイツの社会学者ベックは、「リスクの概念は近代の概念です。それは文明社会における決定の予見できない結果を、予見可能、統制可能なものにする試み」であり、「未来を植民地化する制度化された試み、認知図のことである」という（ウルリッヒ・ベック『世界リスク社会論』二七頁、筑摩書房、二〇一〇年ほか）。リスクという考えは、人間を神の桎梏から解放したが、逆に人間の傲慢さをいっそう増長させたのではないか、ベックの言葉は、そんな意味をふくんでいる。

〈はたけやま　たけみち・北海道大学名誉教授〉